

## 「眠れない一族 食人の痕跡と殺人タンパクの謎」

ダニエル・T・マックス(著), 柴田裕之(訳)(紀伊國屋書店)(2007年12月刊行)

The family that couldn't sleep Daniel T. Max

「殺人タンパク」という目を引く副題から予想されるかも知れないが、本書は哺乳類プリオンに関するものである。「タンパク質の社会」の闇の部分とも言える、アミロイドやプリオンは重篤な神経変性疾患につながるタンパク質の状態である。基礎研究に重きを置く本研究領域の中では一般の方が関心をもつ分野の一つと言える。実際、福岡伸一さん(青山学院大)によるブルーバックスの「プリオン説はほんとうか?」が科学書として大ヒットしたのは記憶に新しい。

本書では、致死性家族性不眠症(FFI)と呼ばれる遺伝性プリオン病に代々苦しめられてきているイタリアの一族の話を軸にしながら、現在知られているプリオンの概念がどのように成立してきたかの歴史を丹念に解説していく。その一族では遺伝的には半々の確率でFFIの変異を受け継ぎ、40~50代ごろより不眠なども含めたプリオン病に陥る。そこから「眠れない(人が出現する)一族」となるのである。

福岡さんの著書にもプリオンの謎を巡る歴史についての記述はあるが、福岡さんの方がより科学的な見地から話を進めているのに対し(実際、Prusiner論文の図がそのまま出てき

たりする)、本書はジャーナリストである著者らしく関係者に話を聞いたりしながらまとめたものだ。特に、Prusiner以前、すなわちクールーの原因をガイジュシエックが探っていく過程はなかなか読ませるし、英国での狂牛病問題の経緯も詳しいので、その辺りを知りたい人は本書を手にとるとよいだろう。

著者はジャーナリストであるだけでなく、プリオンではない別の神経変性疾患にかかっていることも書かれており、この問題に対する切実さ、つまり主観的な部分を垣間見ることできる。たとえば、Prusinerに対しては辛辣な部分も散見され、彼はそれまでのさまざまな説(ガイジュシエックのも含めて)をまとめあげただけで、一番の功績はたいへんキャッチーな「プリオン」という用語を考え出した、というまるでコピーライターみたいな扱いである。

致死性の遺伝病を受け継ぐ人たちがどのような考え方をもっているのか、ということを知る貴重な一冊とも言える。

(田口 英樹)

